

# 「風流志道軒伝」の趣向

## —平賀源内の戯作—

六号 岩永 美穂子

「風流志道軒伝」は、宝暦十三年刊行。宝暦頃、市川海老蔵と江戸の人気を二分していたという講釈師、深井志道軒を主人公とした戯作である。作者平賀源内は、「ゑれきてる」に代表されるような新発明・新趣向に事欠かない人物で、本草学者というのが本来の肩書きである。高松藩に仕えていたが、退職願を出し、他家仕官御構という条件つきで離職している。この作品は、浪人の身となって二年後のものである。源内が戯作に手を染めたのは、御構の影響によってか一定の収入を得る術を持てなかつたので、生活資金を稼ぐというのが第一の目的であつたろうと思われる。

戯作——執筆動機においては戯れ書きにすぎなかつた作品だが、才人であつた源内だけに、内容・構成などにそれまでの戯作には見られない新しいものがある。

\*

この物語は、志道軒の由来を語る形式になっているが、志道軒を導く風来仙人という人物が登場する。この仙人に、源内自身の投影が見られると、中村幸彦氏は指摘しておられ

る。仙人は、目先のことばかりにとらわれて本質を見抜く力のないことを嘆じ、志道軒に諸国の人情を見聞させ、「只東方朔が昔を追い、滑稽を以て人を近寄せ」（巻之二）人を導くように教える。志道軒の前に起こるさまざまな出来事は、すべて仙人の仕組んだもので、用意された障害である。つまり、浅之進がさまざまな経験から獲得していくものは、仙人がそうしむけた結果のものなのである。以上のことは、仙人に源内の投影がみられるという以前の問題である。しかし、浅之進の旅が仙人の思惑のうちに展開されたということは、この物語の影の推進者（主人公）の存在を意識することであり、志道軒という主人公の話を借りた形で、何かを言わんとする人物の心情を量る第一歩となる。

世界の人情を知る旅に出ることは、類まれな資質は持っているが、世間知らずで温室育ちの浅之進には必要なことであつた。まず、信じて修業していた仏道は格式にかくれて不遜なまでの振舞いをしてることに愛想をつかす。格

式だけで信じ込んでしまふ愚かさと同質を見抜く力を持たなければ本當にもものを見ることはできないことを知ることである。また、四季おりおりの風俗に人間の営みのはかなさ、滑稽さを感じ、形式的で中身の無いことをえぐっている。そして「一年の内には千變万化の世渡りも、つまるところは金」（巻之一）という結論に達するのである。色道について、ひととおりの経験をさせているが、それは「人の楽しみは色慾にこの上なしと、汝常く思ひし故」（巻之五）とあるから、折角の浅之進の能力を色慾に溺れさせないよう、その現実を悟らせようとしたのである。また、異国へと旅立った彼だが、その国々は人間の性質を国名に掲げたもので、人間の生活における様々な場面の投影となっている。例えば、権力のある者となし者との関係（大人国と小人国）や差別など、どちらかという人間の性質のきかない面を対象としている。何も世の中のことを知らなかった浅之進が羽扇の力で諸国をめぐり、表と裏を知ったことこのあとと仙人が語り説くことを、経験をふまえた上で理解し悟っていく浅之進は、もはやそれまで盲滅法に仏道修業していた彼ではない。様々な場面を実際に経験することは確かに達観を得るためには必要である。そして、仙人が浅之進に特に与えた試練は、人間が本来持っている、本性よりあらがいがたいもの、それを克服し、それにまかせて溺れることなく本質を見据える目を持たせるためであった。

この作品は、講釈師志道軒の講談のスタイルを借りながら構成されている。その方法を作品に踏襲したのは、どんな点に魅かれたからなのだろうか。単に人気の余勢をかけただけではないものがありそうである。志道軒は軍談を能くしたというが、人を笑わせながら話に引き入れ次第に深い講釈へと移っていったという。表面はおもしろおかしくしながら、うがったことを言っけさせ、浅草の地内で大いに人気を得ていた志道軒の存在は、卑近な対象にしろ興味あるものだったに違いない。自分もまた耳目の集まる存在となり何事かを成したいと考えたのであろう。しかし、源内の熱情は激しく、自由のきかない状況にあってもなお、実際の用に立つ希望を捨て、辻講釈のレベルにおりたこととはできなかった。それだけ、彼は自分の才能を頼みにしていたし、自分の可能性も信じていた。また、講釈という手段（つまりは枠外の）に満足するほど老成していなかったともいえよう。志道軒の説教の内容はというと、君臣の道や聖人の教えといったようなもので、さほど奇矯で進歩的であったというわけではない。源内が問題にして取りあげたのは、ただ、志道軒の講釈の基本的姿勢、立場であった。

高議シテ及ブベカラズザルハ卑論ノ功アルニ若カズ（永富独嘯庵「葆光秘録」）これが志道軒の方法である。源内は、実際に志道軒のようにすることはできない——ふみきれないし、勿論、目的、ねらいが違ふということもある——から、この方法を文学に持ち込むことによって談義本的要素に滑稽をくみ入れた新しいものをうみだしたのである。それが、この作の新鮮さであり文学的価値であるともいえ

よう。話の構成も現今の小説風で新しいが、この立場こそが戯作の立場であるともいえ、源内の執筆のエネルギー、発火点になったのであろうと思われる。

この作品に限らず、源内の作品には強烈な諷刺がちりばめられている。ここでその諷刺の視点について述べてみたい。

主人公浅之進は、仏門に入る前に様々な芸能を試みている。それは父母の勧めによるもので、生来才ある人物だった彼は能くこれを行うことができた。しかし、それゆえに父母は、「かく人に勝れて発明なる子は、必ず短命なるものなり」と考え、出家させてしまおうのである。

芸能といっても、いわゆる俗の芸ではなく華道や茶道など、道としてきわめられたものも諷刺の対象となつている。そのしきたりや形式や権威を裏から見ると、不合理な、馬鹿／＼しいほどの考え方を固持しており、形式ばかり煩瑣になって、それが本道と思ひ込んでいたりすることも滑稽だといふのである。しきたりや作法を盾として、それを知らぬ者を排除するような閉鎖性をも諷している。だから「只、学門と詩哥と書画」が学ぶべきものとしても、そのやり方がそれだけが正しいといった閉鎖的な思い込みを以て権威の内で威張っている——「味噌のみそくさきと、学者の学者くさきは、さん／＼のものなり」——ののだとしたら同じことなのである。別の観点からみると、諷刺は戒めに通じている。芸能に通じることは、仙人の言う「なづむこと」につながる。つまり執、

執心につながるということを嫌ったとも思われる。道理も弁えず、ただ、がむしゃらに励んでも、本心に道をきわめることにはならないのである。「なづむこと」、「とらわれること」仙人はこれらを深く戒めている。

先程も、権威に対する諷刺の目についてふれたが、芸能以外について述べてみたい。まず、浅之進が「一筋に佛法の奥儀を極天下の名僧と成て、衆生を濟度せん」(巻之一)とした仏道である。人を導き救うための道であり、多くの人がそれを頼みに生きている。しかし、その内情は表を飾り権威があるように見せ、人の上に立ち、往生を遂げさせんとするのは、まるで「極楽の店請」(巻之二)であるという。憂き世をのがれるために出家するものだが、浅之進は仏界の方が余計憂しと思われるので俗界へ戻ろうとするのである。墨染めの衣を着ているにもかかわらず、この世の楽しみに耽つていること、つまり中身の伴わない「威を嫌っている」のである。他に、世の学者たちの様子も諷している。律義すぎて融通がきかず、中国の古文献にとらわれ「却て世間なみの者にもおとれり」(巻之一)という。それが正しいとか正統だとかいふ思い込み、わけ知り顔で批判をかわすけれど、それが的を射ていないことを笑っている。斜めからどうのこうのぶつぶつ言っているようで、その実、作者の筆はひるがえって優位にたっている。「言語道断の学者」や「たはけ」とまで言っているのだから、そうであろう。何かを成せるだけの力、権威を早く持ちたと思つたからこそ、権威だけはあるが中身の無い人間た

ちに對して、こういう思いをあらわしたのである。

他に、様々な風俗の國を登場させて、その時代の風俗——例えば、医者、通人、田舎侍など——を諷してもいる。

卷之二に「賢者あれども登庸ことを知らず」という一文がある。これは、伯樂を見出し得なかつた源内の心を端的にあらわした言葉であろう。自分の才能と野心を社会の用に立てたいと願っていた源内の眞価を察する者は少なかつた。宝曆四年源内二十七歳のとき、蔵番退役願を提出するとともに従弟権太夫に家督をつがせているが、同九年、医术修業として三人扶持を下され、同十年、薬坊主格となる。だが、十一年には再び辞職願を出し藩籍を離脱している。彼の眞価を知るあまりか、仕官を拒む彼を学文科なるものを与えて藩にしばらくつけようとすることに反発したのである。学問と研究の独立を願ひ、小藩の小吏で終わることを嫌つた源内であつた。

彼の精神は自由なのに、何ものかに拘束されている

社会体制であり、社会機構であり——そこから心情の上だけでも自由の野に出る手段としての戯作ではなかつたかと思ふ。とはいつても、戯作中で諷するだけで心理的に満足するといふ余裕は見られない。ただ、全編に流れる風来仙人（源内）の考え方の輪郭に、少しばかり言いたいことを言つてみた、戯作という戯れ書きのかげにかくれて精神を解放した体の源内が思われる。しかし、源内は、ただ待つていたのではない。自分が飛びたてないことに、いらいらし、何か拘束されるものを感じるため、見える部分から

取り去つていこうとしているのである。

「賢者あれども登庸ことを知らず」。しかし、この言葉にすがつて自分の才能を認め続けようとする彼の姿を考へるのは、早計であろう。宝曆頃の社会の実情を書き、本物が世渡りのうまい者に排除されようとする状態を書いたのである。

次に、源内独自の文章の妙について述べてみたい。まず、この流麗な文章がどのような下地から生まれたのかさぐつてみる。彼の文章は特に「平賀ぶり」と呼ばれている。源内の家系は太平記にでてくる平賀三郎と関連があり、幼ない頃から先祖の英雄の取り上げられた作品をよく読んでいたらしい。源内が文章を能く上げたというのは、文学作品はもちろん科学書においてもわかる。源内の文章の特徴を城福勇氏は「基礎となつてゐるのは俳文脈ないし狂漢文調であらうが、このほかに浮世草子風な『物語』調、あるいは浄瑠璃がかり、歌舞伎風の文脈」と評しておられる。源内の文章は、内容的には後に平秩東作が「飛花落葉」の序で「憤激と自棄ないませの文章」と評したようなものであつたが、文才という点からみると彼の才能は開放されているように思ふ。一番の特徴である浄瑠璃風については、地口にはじまる言葉遊びがその雲囲氣を出している。志道軒についても、人物そのものに魅かれて題材としたのもあつたろうが、講釈——つまり語ることに對して興味があつたのではないだろうか。彼が幼少の頃、耽読したといわれる「太平記」は軍談の好材料であつたし、民間の演芸とし

て講釈がこの頃隆盛したというの時の流れの産物とするならば領けよう。というのも、少しづつ力を持つようになった町人階級が、滑稽話、軍談によって、自由な精神を持ちながらも何かに拘束されているという感覚から、自分を解きはなとうとしたのではないかと思われるからである。

源内もまた、その辺に魅かれる舌耕芸の精神と共にその舌耕調にも影響を受けたものと思われる。その特徴的なものとして地口があげられる。地口とは「同音異義の語の利用、あるいは一部の語音を変えることにより、もとの言句を全く別なものに仕立てて、笑いを誘う言語遊戯」（日本古典文学大辞典）であるという。確立された句をちよっと視点をかえ、別物にして滑稽味を出したり、文章の区切れに使って調子をつけたり、言葉のもつ規定力を使った言葉遊びとする。例えば、

大師河原のにぎわひ世は空海とぞ知られたり（巻之二）  
は、大師河原に立ち並ぶ食物屋を評して、弘法大師空海にひっかけて「食ふ界」の意味をひびかせている。これは、言葉の権威や威徳を底からひっくり返す表現である。或いは、

とつてもつかぬ歯なしの口をくひしぱり（巻之一）  
のように使い、調子をつけ、文章の途切れを緩和し、流れるような文脈とする。これを用いての「づくし」の趣向は、浄瑠璃などにもたびたびつかわれる。家業にうとい怠け者が俄医者になったときの名前、

青菜賣は淺漬宅庵、肴屋は稲田安康、餅屋は佐藤養閑、

あめ賣は雨井堯仙

これらは、いかにもそれらしく聞こえるが、よく吟味してみると、すぐお里が知れる。同じ音であっても視点をかえると違うものになる。それぞれの言葉の規定力をひびかせておもしろさを引き出すのである。

このように、言葉を様々に駆使することによって、より感覚、知性に訴える作品になっているのである。

「戯作は、口語文または口語調文章の進歩は恐らく史上かつて見たことなく日本語の文学的表現力を可能な限り發揮せしめている」（日本古典文学大辞典）とある。源内の文章は、戯作調文章の先駆として後進の作家たちに影響を与えたといわれる。そういわれる所以はなんであろう。彼の基本的文才については、今は、おくとして、彼が多用した地口をとりあげて彼の言語意識をさぐってみたい。それが、ひいては戯作調文章の先駆といわれる理由につながるからである。

この作品の自序に、  
夫馬鹿の名目一ならず。阿房あり、雲津久あり、部羅坊あり、たはけあり、また安本丹の親玉あり、但同じ詞にて兄イといへば少しやさしく、利口にないといへば

とある。この部分について、井上ひさし氏が言及しておられるが（言語遊戯者の磁場——平賀源内）、ひとつの概念に言葉がいく通りもあり、その言葉がまた新しい概念をうむ、そこに鋭い目を向けている。「兄イ」や「利口にない」では腹を立てない人が「たはけ」や「阿房」といわれれば

腹を立てる。それはつまり、言葉には表と裏があり、ひいては立前と本音があることに気付いていたということにならないだろうか。

「学文科」というのを「仕官ニ而ハ無」（全集、上、六一二頁）と信じていたのに、藩主松平頼恭への奉仕に明け暮れた二年間で、名目ばかりの医術修業料だと気付き辞職した彼だからこそ、表をつくり、本質を見失っているものに対する批判が鋭いのではないだろうか。また、だからこそ本質を知った上で滑稽のかけにかくして講釈していた志道軒に魅かれたのではないだろうかどんなに偉そうにしているも所詮はそんなものだという考え方が、そこにはある。滑稽は正統なものがひっくりかえされるところに生まれる。有名な詞句が別の似たようなものに生まれかわることによって、思いもかけないものになる。言葉の上だけからみると、地口や洒落といわれるものであるが、彼の場合それが考え方の上にも影を落しているのである。そこから、言葉を縦横無尽に操る文章ができたともいえるのではないだろうか。

先程を例に出したが俄医者の名前が、間違った内容のものに関しても、言葉の規定力をもって正当のものに見せかける。つまり、言葉が真理を示さなくなった。そのものの神秘的な力を失いはじめたといえないだろうか。既存の言葉とその意味では表現しえなくなっている状況があるのである。だからこそ、再構成され別の角度からみた、バラエティーに富む言葉がこの時代に隆盛をきわめたのだろう。

\*

「世界の人情をしりたる上にて、世を滑稽の間にさげよ」——風来仙人の教えは、結局これであった。それは、

対象と真正面から対決せずに裏面からうかがって、その癖や失敗の欠点を指摘する（日本古典文学大辞典）

という「うがら」の発想法を短的にあらわした言葉である。また、それがこの戯作の立場ともなっている。源内は戯作を戯れ書きとしか思っていなかっただろうが、その中に彼の思いがはからずも吐露されている。

我三十年來遊民となりき（中略）わらひ艸となるをたのしみとす、今や十余年

志道軒は自著「元無草」でこう言っている。それは「志道軒がいか舌耕家として満足していたかを物語る」（浅野三平氏）が、源内自身は仙人の教えの通りにすることで満足することはなかったようである。志道軒という人物の存在を借りて、自分の心情——仕官をやめ、拘束から逃れて自由に活動しようとしながら「私儀甚多用ニ而扱々埒明不申」とじりじりしている——を述べ、精神だけでも自由の野に解放しようとしたのではないだろうか。諷刺してみせることで、自分が満足する体は見られないが、戯作は源内にとって、生活資金のためであったと同時に、精神解放の一つの方法であったと思われる。

注一、他家に仕官することを禁ずる

注二、「女などは見るにたえでかほうちあかめてにげさると、やがてふかき道のをしへにうつし」山岡俊明『紫のゆかり』